構の特徴を検討した。

2003～2004年に国内の健康な牛、豚、鶏の糞便から分離された大腸菌985株のうち、セフェム耐性の26株について、各種抗菌性物質に対する感受性、PFGE型、血清型、病原因子、β-ラクタマーゼ遺伝子型及びその伝達性を調べた。

その結果、セフェム耐性株は、PFGE型から農場ごとに異なるクローンであることが確認され、血清型及び病原因子の解析から、いずれも人や家畜に病気を引き起こす可能性は低い株と見なされた。セフェム耐性型は、染色体性*ampC*のプロモーター領域の変異によるβ-ラクタマーゼ過剰産生型（牛由来1株）、ESBL産生型（CTX-M-2：豚及びブロイラー由来各1株、CTX-M-18：ブロイラー由来1株）、及びプラスミド性CMY-2型（豚由来2株、採卵鶏由来4株及びブロイラー由来16株）に大別された。多くのCTX-M型及びCMY-2型株はセフェム耐性遺伝子をコードする伝達性プラスミドを保有し、かつ他の薬剤耐性もセフェム耐性を伴って伝達されたことから、共耐性の関与が示唆された。また、CMY-2型株では、ブロイラー農場の一部で、異なる農場由来株であるにも関わらず、セフェム耐性をコードするプラスミドの制限酵素切断パターンが類似する株が見られ、これらのプラスミドが共通する起源に由来する可能性も示唆された。

新薬紹介

セボフルランを含有する犬用吸入麻酔剤

（平成18年2月6日承認）

セボフルランを有効成分とする犬の全身麻酔に用いられる吸入麻酔剤が承認されたので、その概要を紹介する。

セボフルランは、メチルイソプロピルエーテルのフッ素化誘導体であり、動物用医薬品として既に承認されている吸入麻酔剤の有効成分であるイソフルランと類縁物質である。麻酔の導入・覚醒が速やかで、麻酔深度の調節も容易である。また、気道への刺激と臭気がほとんどないため、マスクによる麻酔の導入が可能である。

1．成分及び分量

1 mL中　セボフルラン　1 mL

2．用法及び用量

通常、鎮静剤等を前投与する。

本剤を維持麻酔のみに用いる場合は、注射用麻酔剤等で麻酔導入した後、挿管した気管内チューブを用いて、セボフルランと酸素の混合ガスを吸入させ外科的麻酔状態を維持する。

本剤を導入及び維持麻酔に用いる場合は、マスクを用いて酸素を1分間以上吸入させマスクに馴らした後、セボフルランと酸素の混合ガスによって麻酔導入する。次いで挿管した気管内チューブを用いて、混合ガスを吸入させ外科的麻酔状態を維持する。

本剤の麻酔濃度は、4.8%以下で使用すること。

動物の臨床徴候を厳重に管理しながら、最小有効濃度を吸入させること。

3．効能又は効果

犬：全身麻酔

4．特筆すべき使用上の注意

【犬に対する注意】

1　制限事項

(1) セボフルランあるいは他のハロゲン化麻酔剤に対する感受性が確認されている動物には使用しないこと。

(2) 妊娠中及び授乳中の動物には使用しないこと。

(3) 以下の動物には安全性が確認されていない。

①肝機能障害あるいは腎機能障害のある動物

②高齢動物

③幼若動物（6か月齢以下）

(4) ハロセン麻酔に比べ強い呼吸抑制作用を示すとの報告がある。

(5) 本剤はイソフルランに比べ有効な麻酔深度を示すのに必要な濃度が高いため、前投与薬の効果が減弱し患犬が疼痛を示した場合等に吸入濃度を急激に上げると強い呼吸抑制により死亡するおそれがあるので、臨床徴候を注意深く観察しながら、吸入濃度を